

—ただキリストと共に歩む—

# 水戸無教會

第6号

編集 半田梅雄

信仰即行為

松本文助

今から十五年前に紀元二千六百年の大祝典が行われ、日本全土に記念事業が行われた。その記念事業の一つとして植樹が奨励されたので私は縣から榉の苗七本の配給を受けた。その内三本は運動場の北端垣根に添うて植えた。南側は広々とした運動場で日当りがよく、冬は霜だけ一つしない場所なので三本共直径七寸位の太さとなつて、この炎暑に涼しい葉影をつくつてゐる。処が他の四本の中の本は戦災で焼かれ、残る一本は敷地の東南の角に、桧葉と一緒に境界線の目印になるようにと植えたのであつたが、いまだに腕の太さ位で細長いかにも弱々しきものである。これは桧葉と雑居の故もあるうしまた

周囲に大きな桧や杉があつて太陽の光線が充分に受けられない為である。この百と一の比以上の差違に深い感動を受けた。この差違の出来たことは確に太陽の光線を受ける差に比例するように考えられる。同時に私は信仰の秘密をさとり得たような気がする。イエスが『もし芥種子一粒ほどの信仰あらばこの山に「此処より彼処に移れ」と言うとも移らん、斯て汝ら能はぬこと無るべし』マタイ一七・二〇。芥種一粒ほどの小さな信仰さえあれば到底動かすことの出来ない山でも動かすことが出来、不可能と云うことがないのであると云うのである。然しこれはその人自身の力でないことは云うまでもない

い。信仰あらばである。この信仰こそ神の力がその信ずる者に働くからで結局神様御自身の力であるからである。

植物が太陽の光に依つて成長するごとく、私共も神の光を受けること即ち神を信ずることによつて成長発展があるのである。

放蕩息子が自己の非を悔いて父の家に帰つたときに生活が出来、僕となつて働く力も湧いてくる様に、神の懐に帰り神の愛に生きるときに私達自身に変化が始まる。力が生じ、行為となつて表われるのである。

信仰即行為である。

エホバ汝等のために

戦いたまはん

汝等は

静りて居るべし

(出エジプト記

一四ノ一四)

# 永生か滅亡か

使徒行伝研究(二)

半田梅雄

使徒行伝を学ぶ上に極めて重要なことが二つある。

一つはこの書が聖靈行伝と呼ばれる理由であり、他の一つは使徒行伝は今日も尚続いて綴られつゝあると言うことである。

聖靈行伝とは、この伝記が単に人間としてのパウロやペテロその他の人々を画くことが目的ではなく、神が一人一人を造り変えて使徒となし、これを用いて神の力と愛とを人類に示し給ひし事実を云い、使徒の伝記は今日も綴りて書き綴られていたとは、召されて神の僕となつたすべてのクリスチャンは、日々の言行を

通して使徒伝に新しい一頁を加えつゝあるという意味である。従つて聖靈行伝

は、初代の使徒達の独占物ではなく、歴史上のすべてのクリスチャンを動かし給う神の御力の別名であり、それ故に今日のクリスチャンは現実的な現象にのみとられて、極めて限られた時代的意義の中に人生を釘づけにしても、されてもならないのである。

使徒行伝を通読して感ずることは、一九〇〇年前の時代的背景と共にその舞台の広さ、登場人物の多彩、描写の素晴らしさ等驚くべき多くのものであるが、何

よりも滅亡するものと、永遠に生きるものゝ明白な相違である。眞理はくどくどしい説明を必要としない。光明か、暗黒か。滅亡か、生命か。その何れかゞ事実をもつてひとりひとりにのぞむのである。これ以上峻烈な裁きはあるまい。

私たちは、ロマ総督の地位に立つて現世の政治的支配力の絶対優越性を強調しようとするのであるか、アナニヤ、サツピラのように信仰は信仰、生活は生活とわり切つて亡ぶる肉の体にするのか、或はアグリッパの如く有閑王者の生活を理想とするか、それともそれらすべてに組せず、ステパノの如く、パウロの如く、唯キリストに在りて神を信する信仰のみによつて永遠の生命に生きんことを願う

か、何れにせよ行伝の提供する豊富な内容は、無限の意味の中に峻厳なる神の力と御意思を私たちの眼の前に明らかに示してくれるであらう。勿論その軽重は、各人の信仰の秤がこれを決定するであらうが。

人は屢々過去に比べて現在の比重を極端に大きく受け取り勝である。毎日の新聞記事の方が聖書より注目を引き易いのはこの為である。然し行伝の一頁は百年分の新聞を一枚に圧縮した以上の価値を持つている。繰返して云う。行伝の眞価はそれが人類にとつて過去の歴史的事実であると共に、現代をも未来をも支配する一貫不動の現実性にある。

# そのすべての恩恵を忘るゝなかれ

(詩篇一〇三・二)

半田信子

「余りにも神の恵みの深ければ、めぐみをしらぬ人もありけり」これは奥野昌綱氏の言葉であるが、實際神のめぐみは無制限にしかも「お返し」の必要なしに豊かに与えられている。私達は一日否一時たりとも此の御めぐみなしには生活する事が出来ない。健康で何不自由なく過している時には、余り感謝の念をもたず当然の事のように暮してしまいやすいけれど、病に倒れたり苦しみに会つたりすると今更の如く我が身に注がれている神の御恩恵の深さ、広さ、大きさ、その限りなきことを知るのである。然し世の中には無償で

与えられているこの豊かな御恩寵に気がつかず、傲慢な態度で過している人が多い。健康にめぐまれて毎日を無事に過して居りながら、あたかも自分の力で生きてゐるかの様に「神様なんか信じなくても・・・」と言っている人、巨万の富をつみ上げたり、立派な地位や名誉を得て、どんなものだろうぬぼれてゐる人、神さまの存在さへも否定して過している人が少くない。不平不満の絶えない人、こういう人も又、神のめぐみを知らぬ人である。思いがけない不幸や困難に遭遇すると、世界で自分程不幸なものはいない

ど、思い込んで愚痴をこぼしている人、どんなに金銭的に、物質的にめぐまれていても、あく事を知らず只集める事のみにあくせくとして過している人、いわゆるクリスチャンと称する人の中にも此の種の人を多くみうける。内村鑑三先生も「一日一生」の中に「神のすでに下し給ひし恩恵について感謝せよ。旧恩について感謝せずして新恩にあづかる能わず、かの不平家と称する徒が終生満足を感じ得ざるは彼が感謝の念においてかくるところあればなり」とか、れて居られるが、感謝の思いをもたない人ほど哀れでありそしてみにくいものはないと思う。「自分が自分と自分の事を気にすれば誰でも神経衰弱になる。そういう時手放して、キリストの聖顔を仰

ぐことを覚えよ。そこに我らの救がのぞむ」(嘉信)どんな逆境、苦難にあつても与えられている御恩恵を念い感謝して希望を失わずに生活出来る人は幸福である。

のぞみも消えゆくまでに世の嵐に悩むとき  
数えてみよ主のめぐみ 汝が心は安きを得ん  
数えよ主のめぐみ 数えよいとつづつ  
数えてみよ主のめぐみ つぶやきなどいかにであらん

「神を愛するもの即ち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となる」ことを信ずる私達は、主に在るよろこびと感謝、希望をもつて生活することが出来るのである。

常に磊々絶えず折れすべての事感謝せよ。これキリスト・イエスによりて神の汝らに求めたまうところなり

(テサロニケ前五・一六一―八)

# 傲慢

大森 孝 夫

私はある牧師から無教会に対する批評の一つとして「東京などの無教会者には尊敬を払えるが、地方の無教会者の中にはどうも困る人がいる」という話をききました。彼の直接の説明と、その説明に対する私の推察とを加えればその「困る」という理由の中には次の二点があるようであります。つまり「傲慢」と「教養の欠乏」であります。たしかに地方の無教会グループに属している私自身について云えば、後者の「教養の欠乏」という事は大いに認められますが「傲慢」ということは東京、地方を問わず眞の無教会者にはあり得ないと信じます。ともあ

れ今日は「傲慢」について考え、私たちの信仰生活反省の一助にしたいと思えます。一体「傲慢」ということは特定の宗派に熱心なる宗教者の上に現われ易い危険の一つでありまして狂信的な人になればなる程、己の信仰を神の如き位置に祭り上げ他を審き之を排撃をして止みません。誠に最大の罪であります。無教会は「信仰のみの信仰」を唱えます。即ちキリスト者であるためにはキリストを信ずることだけが絶対条件であつて、洗礼を受け教会員となり聖餐に与るといふような形式的なことはどうでもよいことだと信じます。本当に無教会は純粋な福音

第一主義なのであります。然し自称無教会主義を唱えている無知、狂信の人たちの中には眞の無教会信仰の何たるかを知らず「無」の字に縛られキリスト教の一切の制度、形式を否定し、教会に出席するものは直のキリスト信者ではないなど、称する人があるかも知れません。しかしこれでは「人は教会のないことによつて救われる」という傲慢なパリサイ根性に外なりません。実に無教会の敵であります。またかゝる程、偏狭でなくとも、無教会主義を唱える人の中には己れの信仰を誇り教会や他人の欠点誤りを指摘するに侮蔑と冷笑を以てするような人があるかも知れません。而してこれまた傲慢な愛のない教派根性の一つであります。再び繰返しますが眞

の無教会主義は十字架の贖いの信仰に立ち、キリストに依り頼む外に全く救われる途がない、たゞたゞ「信仰のみの信仰」を以て神様に対すべきであつて儀式、制度、組織等によつて救われるのではない故キリスト者としてはこれら第二義的なものには全く自由であるべきだといふのであります。そして自由であるからには決して教会に顔を出してはいけない、洗礼を受けてはならないなど、すべてを律法化しようとするものではありません。また洗礼は受けずとも神の御前に全く打碎かれ、キリストと共に死に、キリストと共に甦つた眞の無教会キリスト者であるならば己の信仰に優越感を持ち自己と異なる信仰の人を排斥したり審いたりすることなく、あくまで

眞剣に神より与えられた愛を以て意見を交し、協力し合い（これは安易な妥協ではない）それらの人々と挙げて一層、適切に神に仕えんとするであります。

聖書研究に全力を傾注している無教会者であるならば、マタイ五・三、二・二九、一八・四、マルコ一〇・一八、ルカ一四・一一、ロマ二・三、一四・一〇、コリント前一三・四、ピリピ二・三、二・八等の聖句の教えに強く心うたれるはずであります。

## 来 信

東京 A兄

その節は色々とお世話になりました。たつた三日間ではありましたがあの会を開くに当つては、その計画、準備から手続、運用、後始

末に至る迄その苦勞は並大抵の事ではないことを知つてゐます。私などは唯お世話になりつばなしで非常に心苦しく存じています。しかし

先生方の持たれたご苦勞は単なる苦勞だけで終りませんでした。先生は御覧になりましたか、あの皆んなの喜びにあふれた顔を、感謝に満ちた言葉を、そして希望にあふれた瞳を・・・黒崎先生も云つて居られた様にあの会は確かに教派を超越し、神にあつて一つ心となり、共に靈の交りを持つ事が出来た眞のエクレシアの姿であると云う事が出来ます。その意味でも大きな

意義があつたと感ぜずには  
いられません。

私は今こゝ東京に居て、  
あの日の事を思い浮べて見

す。それはこの目まぐるしい  
気ぜわしい東京から急に  
あの静かな美しい山の中に  
飛び込んだ故もあるでしょ

### 夏期講習会に靈の参加

七月八日午後二一時逝去

講習会の参加をお喜び下さり感謝です。なかなか多数の人の出席、楽しみであります。尚私は商用（？）があまりまして八日に出発、晴嵐荘に泊る予定です。そして十一日は午後一時解散ということになりますので、この日も商用で石岡え立寄りたくあります。それは帰宅がおそくなりますので、できますれば十一日貴兄宅に一宿一飯のお世話になります。夏であり、何かと御面倒ではありますが、身勝手お許し下され度お願いいたします。右お願ひまで、近くお会いする日を待望しつゝ。

信愛園 故森 田隆夫

るとあの会がたつた三日間の事とは到底考えられない気がするのです。まるで一週間、否一ヶ月間位滞在して居たような錯覚を感じま

び明確に自分の  
頭に刻み込み本心に自分の  
ものにしたと思つていま  
す。(後畧)

が短期間に最大の慰安を私達に与え給うた結果である  
と私には思えるのでありま  
す。私はこれ  
から黒崎先生  
のガラテヤ書  
の御講義の筆  
記帳を今一度  
開いてみて、  
今度は自分で  
先生の言葉を  
頭に浮べなが  
ら、パウロの  
書簡を通して  
神の眞意を再

# 夏期講習会より

小貫 武 壽

今回黒崎幸吉先生のご厚意により、かねてよりの懸案であった夏期講習会が素

晴らしく有意義なものとなつたことは、何とも云い様もなく嬉しい。実際我々の小さな集まりが誕生して

りに、会に於て受けた感想をのべてみるのも又何かの足しにならうと思う。

私は構わない。私の相手は神である。故に人からの非難は、私に落度があつた場合は反省しよう。併し神の前に正しい時は勇を起して断行しようと思う。クリスマスチャンとは、聖人君子の曰ではない。罪にけがれ、罪に悩み、内外の誘惑と闘いつゝ生きるものである。という意味のことを内村鑑三先生が云われたのを讀んだことがある。

「噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我を救はん者は誰ぞ、我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す」(ロマ書七の二四―二五)パウロに於て然り。信仰のみ、信仰によつて私達は救われ、神の前に義とせられる。不完全に悩む我々は此の希望を持つて、日々の歩みに平安を持ち続け、忍耐を以て最後の勝利を勝ち取るうではないか。

第一に先づ、黒崎先生より受けたクリスマスチャンの迫りであつた。先生は洵に柔和であつて、何処迄も細かに集まる人達の為に氣を遣つて居られた。(勿論集まる人達のみに限つたことではないと思うが)しかもそこ

に道理をわきまえた堅さがある。私の様な不出来な人間は、話合つてい

うちにピーンと自分のまづ

かつたことを反省させられ

て了うのである。『己の如

く隣人を愛すべし』『人に

せられんと思ふ如く人にも

然なせ』と云うキリストの

言葉をやかみ直さなければ

ならない。

第二に、集まつた人達が

如何にも熱心で、純な方達

許りであつたことである。

女の方達も口紅等をつけて

居ないので、衣料店に居

て、派手な服装をした人達

許り見つけている今日の私

には、反つて不自然にさえ

思えた位であつた。又遙々

他県から出席なさつた方

や、自転車で七八里の道の

りを馳参じた一老人には

すつかり頭の下る思いで

あつた。すべては神聖な熱

と意気の結晶である。だから

力強さと清らかさが溢れ

ていたのである。たつた一

日で俗界に戻つた私は、又

毎日商業に励んでゐる。兎

もすれば利益を追う心、安

易を求め誤魔化す心と、毎

日斗いである。何度も破

れ、自分でにがい盃を飲ん

でいます。未だ未だ不慣れ

で知識の乏しい自分を見た

人は外観からは駄目な人間

だと思ふであらう。併し、

私は甚だ意久地ないこと

であつたが、家の都合を絶

ち切れず、一日で家へ帰つ

て了つたが、凡人は凡人な

# 聖書講習会に参加して

— 自然と歴史とを活かすもの —

石原 秀 志

嘗ての縣立修養道場であり、現在は西山研修所として利用されている我々の講習会場は、徳川光圀（義

を通して共に学ぶ四十人の兄弟姉妹達の魂を如何に強く揺り動かした事であるう。

公）ゆかりの地と云うに止らず、その当時に於ては全国より求道の為に集り来た学僧三千を擁したと言われる久昌寺壇林の跡に設けられている。久慈川の沖積地に臨む丘陵地ではあるが、山と谷と亭々たる赤松樹林との織り為す見事な景觀と共に、此の歴史的な場にあると云う事が、此処に三日間の生活を共にしつつ、主にありて一つとなり、一つの眞理を黒崎先生

しかし自然と歴史とは唯福音イエス・キリストの事實に触れる事によつてのみ我等の前に新しい意味をもつて迫つて来る。此の地に、ガラテヤ書を通して新しく福音のほんとの意義を学ぶ事が出来た事は、その意味で、此処太田の地に美しい装いの自然と、烈々たる求道者の道統とを我等のものとしつゝ、それらの背後に働き給う主なる創造者の愛に触れ新しい光の唯中

に歩ましめられる事であった。更に云えば、我等を生み哺んでくれた祖国日本の美しい自然と、その独自の民族の歴史とが、福音によつて新しく活かされた生命によつて潤される時に、日本国はその天職を自覚し、世界の平和に一つの寄与を為し得るに至るであろう。内村先生の福音的祖国觀もその確信と希望との表明に外ならない。

さて我らの孝んだガラテヤ書の精神とは何であつたか。それはイエス・キリストの僕パウロが、それによつて捉えられ、生かされ、そしてその事を宣べ伝えされ、その為に迫害され、やがて捕えられ、最後に殉教の死迄で追いやられたあのイエス・キリストの事實に外ならない。だからあの「十字架につけられ給

いしまゝなる」イエス・キリストからガラテヤの教会が退転して古い律法の義を誇ろうとした時に、パウロの心底よりの福音に対する愛惜は、ガラテヤ人に対する燃え立つ怒りとなつて爆発したのであつた。けれども彼の福音にある愛は此の怒りを超え、福音によつて活かされた者の唯御冥によつて歩む生活を指示する事によつて、彼等に対する愛が一層深いものとされたのであつた。

奴隷より子へ、束縛より自由へ、そしてその事は唯彼「イエス・キリスト」にあつて新しい人とされる事によつてのみ可能である事を、今一度明白かつ痛烈に彼らに迫り訴えたのである。

我等が此のキリスト教の中心的事実、そしてその中

心に在し給う生けるイエス・キリストの生命に歩む時に、我等の福音的生命も亦常に新しく常に自由である。

(三〇・七・二三)

## 後記

○思えば深い神の恩恵であつた。好天と順調な進展は我らの夏期講習会を一層崑ばしいものとした。神は黒崎先生をこの地に遣わし給ひ、又多くの兄弟姉妹を殊更に愛し給うたと信ずる。この講習会を通して最大のよろこびは神のエクレスヤは実在し、それは二人三人我が名によりて集まる所に我も居るなりと主が云われた言葉通りであること。何事もキリスト・イエ

スの導きによるのであり、集会も研究もキリスト在し給わぬ時如何なる努力も空しいのである。眼に見える教会無教会の融合とか橋渡しよりは、一人一人がキリスト・イエスのみに生きる時、すべては解消するであらう。それは言葉ではない事実である。

○別掲の手紙でおわकारの通り、講習会に霊のみの参加者が一人あつたことをお知らせする。和歌山県の某療養所に療養中の一青年を神は全く不思議な方法をもつて( )え給うた。全くポツンと一人、信仰のみによつて彼は神の愛のみ手に懐かれたのである。野村伊都子さん、政池仁先生が彼を援けることになつた。恵の糸は栃木県の信愛園(村松藤枝姉)えつながら、茨城県立アフターケアの私の

所に引つがれようとした。彼は家郷伝道に既に燃え始めていたが、信仰を全生活のものとすゝる為と信愛園を少しでも援ける為に働きつゝあつたのである。講習会の前夜彼は突然そして永久に神の手に召された。恐らく絶筆であらうこの葉書を手にして私は彼を羨ましくさえ思う。家郷には愛妻と二児がある。信仰に於ては生れて間もないこの嬰兒は、既に堂々と一人旅を続けて居つた。一夜宿つたゞけだが、彼の飛び抜けて蒼白い顔が話しているうちに全然気にならなくなつたのを憶い起す。何故であらうか。私は唯黙つてイエス・キリストにある幸福を思うのである。

○講習会に参加された多くの方々から有難いお便りを頂いた。一々御返事は差上

げないが、今後とも主にありを切にお願ひする。○別頁にA兄の感想的書簡を掲げさせて頂いた。すべては感謝の一言に盡きる。○既に唐もろこしの葉ずれは秋である。御健斗を祈る。(半田)

昭和三十年八月 発行  
水戸無教会第六号  
実費十円十共  
編集兼印刷人 半田梅雄  
発行人 松本文助  
発行所 水戸市東原町四六四二  
水戸幼稚園内  
水戸無教会